
「泣いて許しを乞うまで俺の玩具になれ」
迷宮の虎に囚われた司祭見習いの十一日間 【体験版】

【 目 次 】

第1話 迷宮の遭遇

第2話 観察者の眼

第3話 剥がれる痛み

1

第1話 迷宮の遭遇

松明の炎が揺れ、壁に影を躍らせた。

「誰か、いませんか」

アキラの声は石壁に吸い込まれ、返ってくるのは自分のこだまだけだった。琥珀色の瞳が不安に揺れる。眼鏡のレンズに、松明の光が反射した。

迷宮に足を踏み入れて三日。食料は底を尽き、水も残りわずか。司祭見習いとして、この迷宮に封印された聖遺物を回収する任務だった。だが道に迷い、今や出口すら分らない。

華奢な体が壁にもたれる。前髪が額に張り付いていた。

「神よ」

祈りの言葉が唇から零れる。けれど、心のどこかで分かっていた。自分のような罪人に、神の慈悲など届かない。

教会への借金。それは過去の罪を贖うための金だった。返済のために、こんな危険な任務を引き受けたのに。

足音が聞こえた。

アキラは息を呑み、松明を掲げた。暗闇の奥から、影が近づいてくる。

「おいおい、こんなところで野垂れ死にか？」

低い声。嘲りを含んだ響き。

松明の光に照らされたのは、長身の男だった。ツープロックの髪、奥二重の鋭い目、無精ヒゲ。そして、頭頂部からは虎の耳が覗き、腰からは縞模様の尾が揺れている。

獣人。

アキラの喉が引きつった。獣人は人間社会から追われた存在。盗賊や傭兵として生きる者が多い。

「聖職者か」

男は品定めするようにアキラを見下ろした。虎の瞳孔が細まる。

「そのローブ、見覚えがあるな。中央教会の司祭見習いってところか」

アキラは後ずさった。背中が壁にぶつかる。

「な、何者ですか」

「名乗るほどの者じゃない。だが、お前が知りたいのは別のことだろう？」

男が一步近づく。アキラの鼻先に、獣の匂いが届いた。

「ここから出る方法。知りたいか？」

アキラの心臓が跳ねた。出口を知っている。この男は、この迷宮を知り尽くしている。

「教えて、ください」

「タダで？」

男が笑った。牙が光る。

「俺はレンガ。この迷宮を根城にしてる。お前みたいな間抜けが迷い込むと、たまに拾ってやるんだ。もちろん、見返りはもらうがな」

レンガの手がアキラのローブを掴んだ。乱暴に引き寄せられ、体が傾ぐ。

「な、何を」

「身体検査だ。金目のものはあるか？」

抵抗する間もなく、ローブの内ポケットを探られた。財布、護符、そして。

レンガの手が止まった。

「これは」

一枚の羊皮紙。アキラの顔から血の気が引いた。

「返してください、それは」

「借金証書か」

レンガが羊皮紙を広げる。虎の目が文字を追った。

「へえ。三百金貨。司祭見習いの給金じゃ、一生かかっても返せない額だな」

アキラの唇が震えた。あの証書は誰にも見られてはならなかった。教会内での立場が、一瞬で崩れる。

「お願いします。返して」

「理由は？」

「それは」

言えなかった。罪の内容など、口にできるはずがない。

レンガが証書をひらひらと振った。

「面白いな。清廉潔白なはずの聖職者が、こんな額の借金を抱えてる。何をやらかした？

横領か？ それとも、もっと面白いことか？」

「違います」

「じゃあ何だ」

アキラは唇を噛んだ。レンガの視線が、まるで獲物を見定める捕食者のようだった。

「まあいい。理由はそのうち吐かせてやる」

レンガが証書を懐にしまった。

「お前の立場は分かった。この証書が教会に届けば、お前は終わりだ。違うか？」

アキラは答えられなかった。沈黙が肯定だと、レンガには伝わっただろう。

「だったら話は簡単だ」

レンガがアキラの顎を掴んだ。顔を持ち上げられ、虎の目と視線が交わる。

「俺の言うことを聞け。そうすれば、出口まで連れてってやる。証書も返してやる」

「言うこと、とは」

「何でもだ」

レンガの唇が歪んだ。

「お前が泣いて許しを乞うまで、俺の玩具になれ」

アキラの全身が強張った。意味を理解するのに、数秒かった。

「そんな、こと」

「嫌なら勝手に死ぬ。この迷宮から一人で出られると思うなら、試してみろ」

レンガがアキラを突き放した。華奢な体がよくめき、壁に背中をぶつける。

選択肢などなかった。

出口を知らなければ死ぬ。証書を取り戻さなければ、生きて出ても社会的に死ぬ。

アキラは目を閉じた。神への祈りが唇から漏れる。けれど神は答えない。答えるはずがない。自分は罪人なのだから。

「分かり、ました」

声が震えた。レンガが満足げに笑う。

「いい子だ。じゃあ、最初の命令だ」

レンガがアキラのローブに手をかけた。

「脱げ」

石壁に囲まれた広間。松明が数本、壁に差し込まれている。レンガがアキラを連れてきた場所だった。アキラの松明も、空いた壁穴に差し込まれた。

「ここなら誰も来ない。ゆっくり楽しめる」

レンガの尾がゆらりと揺れた。虎の耳がピンと立ち、獲物を前にした捕食者の顔をしている。

アキラは震える手でローブを脱いだ。下に着ていた白いシャツと、膝丈のズボンが露わになる。

「全部だ」

レンガの声は冷たかった。

アキラの指が止まった。眼鏡の奥で、琥珀色の瞳が揺れる。

「お願いします、せめて」

「何を勘違いしてる？」

レンガが近づいた。長身の体がアキラの視界を覆う。

「お前に選ぶ権利はない。俺が脱げと言ったら、脱ぐ。それだけだ」

アキラの喉が鳴った。唾を飲み込む音が、やけに大きく響いた。

震える指がシャツのボタンを外していく。一つ、二つ、三つ。白い肌が露わになる。華奢な胸板、薄い筋肉、浮き出た鎖骨。

シャツが床に落ちた。

「続けろ」

ズボンの紐に手をかける。アキラの目尻が熱くなった。けれど、涙は流さなかった。

ズボンが足元に落ちる。最後の下着だけが残った。

「それも」

「神よ」

アキラの唇が祈りを紡いだ。下着を下ろす。

生まれたままの姿が、松明の光に照らされた。

レンガの目がアキラの股間に向けられた。まだ萎えた状態のペニスが、恥ずかしげに垂れ下がっている。包皮に覆われた亀頭、小ぶりの睾丸。体毛は薄く、肌は白い。

「へえ」

レンガが吟味するように眺め回した。アキラは両手で股間を隠そうとしたが、レンガに手首を掴まれた。

「隠すな。見せろ」

「っ」

手を引き離される。アキラの体が強張り、顔が朱に染まった。首筋から耳まで、熱が上る。

「聖職者ってのは、禁欲を旨とするんだっか」

レンガの指がアキラの腹を撫でた。ひんやりとした爪の感触に、アキラの肌が粟立つ。

「こんな体で、よく我慢できるな。それとも」

指が下へ滑る。恥骨の上を這い、陰毛を掻き分けた。

「実は、こっそり抜いてるのか？」

「そんなこと、しません」

アキラの声が裏返った。レンガの指が、萎えたペニスの根元に触れた。

「ふうん。じゃあ、触られるのも初めてか」

アキラは答えられなかった。沈黙が肯定だと、レンガには分かっているようだった。

「面白いな」

レンガの指がペニスを摘まみ上げた。人差し指と親指で軽く挟み、皮を引っ張る。

「んっ」

アキラの喉から、小さな声が漏れた。

「いい声だ。もっと聞かせろ」

レンガの指がペニスを弄び始めた。皮を剥き、亀頭を露出させる。ピンク色の先端が、冷たい空気に触れて縮こまった。

「小さいな。まあ、聖職者らしいか」

言葉責めがアキラの羞恥を煽った。顔が熱い。目を逸らしたくても、レンガの視線に縫い止められている。

指が亀頭を擦った。乾いた刺激に、アキラの腰がびくりと跳ねる。

「お、反応した」

レンガが楽しそうに笑った。指の動きが速くなる。こりこりと亀頭を刺激され、アキラのペニスが少しずつ硬くなり始めた。

「嫌だと言いながら、体は正直だな」

「ち、違います」

「何が違う？ ほら、もう半勃起だ」

レンガがアキラのペニスを握った。ぐにっ、と柔らかい肉が形を変える。

「んんっ」

アキラの膝が笑った。壁に背中を預けなければ、立ってられない。

レンガの手が上下に動き始めた。しゅっ、しゅっ、と乾いた音が響く。

「乾いてるな。ちょっと待ってろ」

レンガが腰の袋から小瓶を取り出した。蓋を開け、透明な液体を手のひらに垂らす。

「迷宮で拾った油だ。色々使える」

油を塗られた手が、再びアキラのペニスを握った。今度は、ぬるりと滑らかに動く。

「っあ」

アキラの声が大きくなった。油の感触が、直接神経を刺激するようだった。

しゅこ、しゅこ、しゅこ。

レンガの手が規則正しく動く。アキラのペニスは完全に勃起し、上を向いて脈打っていた。亀頭は赤く充血し、先端から透明な液が滲み始めている。

「もう先走ってる。早いな」

レンガの指が尿道口を擦った。じゅるっ、と粘液が絡む音がする。

「あっ、あっ、やめ」

「やめない」

レンガの手が加速した。シュコシュコシュコ、と淫らな音が広間に響く。

アキラの腰が勝手に動き始めた。レンガの手に合わせて、前後に揺れる。

「自分から腰振ってるぞ。気持ちいいか？」

「ちが、違う」

「嘘つくな。顔見てしろ」

レンガの空いた手がアキラの顎を掴み、顔を上げさせた。

「とろけてるぞ。目は潤んで、口は半開き。完全に発情した顔だ」

アキラの目尻から涙が溢れた。羞恥で、快感で、何もかもが混ざり合っている。

「い、いや」

「何が嫌なんだ？ 気持ちいいのが嫌か？ それとも、俺に見られてるのが嫌か？」

レンガの手が亀頭を重点的に刺激し始めた。くにくに、ぐりぐり、と敏感な部分を執拗に擦る。

「あっ、あああっ」

アキラの声が高くなった。全身が震え、膝がガクガクと笑っている。

「もう限界か？ 早いな。やっぱり童貞だったか」

「っ」

図星を突かれ、アキラの体が強張った。

「当たりか。聖職者で童貞。しかも借金持ち。お前、どこまで面白いんだ」

レンガの手が止まった。アキラのペニスは限界まで張り詰め、先端から先走りが糸を引いて垂れている。

「さて、ここからが本番だ」

レンガがアキラの体を壁から引き剥がした。よろめくアキラの背中を押し、広間の中央へ歩かせ

「ちゃんと立て。そう、足を開いて」

アキラは命じられるまま、足を肩幅に開いた。勃起したペニスが、上を向いて揺れている。先走りが太ももを伝って流れ落ちた。

「いい眺めだ。じゃあ、命令だ」

レンガがアキラの耳元に顔を寄せた。熱い息が、敏感な耳たぶを撫でる。

「そのまま歩け。勃起を見せびらかすように、堂々と」

「え」

「聞こえなかったか？ この広間を一周しろ。勃起したまま、俺に見せつけるように歩け」

アキラの顔が蒼白になった。

「そんな、こと」

「できないなら、証書は教会に送る。選べ」

アキラの唇が震えた。レンガの虎の目が、逃がさぬとでも言うように光っている。

他に道はなかった。

アキラは一步を踏み出した。

勃起したペニスが、歩くたびに上下に揺れる。張り詰めた竿が空気を切り、先走りが飛び散って石床に点々と跡を残した。透明な液体が糸を引き、歩くたびにぷつりと切れる。

「いいぞ。もっと堂々と。胸を張れ」

レンガの声が背後から追いかけてくる。アキラは歯を食いしばり、顔を上げた。

羞恥で顔が熱い。全身が火照っている。なのに、ペニスは萎える気配がなかった。むしろ、見られているという意識が、さらに血を送り込んでいるようだった。亀頭は赤黒く充血し、血管が浮き出て脈打っている。

「お前、見られると興奮するタイプか」

レンガが笑った。

「聖職者のくせに、露出狂の気があるとはな」

「違、います」

「じゃあなぜ、さっきより硬くなってる？ 亀頭の色を見ろ。もう限界じゃないか」

アキラは答えられなかった。自分でも分からなかった。ただ、体が勝手に反応している。

広間の四分の一を歩いた。レンガの視線が、ずっと背中に突き刺さっている。

「止まれ」

アキラは足を止めた。

「振り向いて、俺を見ろ」

ゆっくりと振り返る。レンガは壁にもたれ、腕を組んでいた。虎の目が、アキラの勃起を舐めるように見ている。

「お前の勃起、いい形してるな。上反りで、亀頭がデカイ。童貞のくせに、使えそうなモノ持ってる」

アキラの顔が熱くなった。自分のペニスを品評されている。聖職者として、これほどの屈辱があるだろうか。

「先走りが止まらないな。床が濡れてる」

レンガが顎で床を示した。確かに、アキラの足元には透明な液体が点々と落ちていた。

「そんなに興奮してるのか。俺に見られて、勃起して歩かされて、興奮してるんだろ？」

「ちがっ」

「違わないだろ。ほら、また先走りが垂れた。お前の体は正直だ」

アキラは下を見た。確かに、ペニスの先端から、透明な液がとろりと垂れている。糸を引いて落ち、床に小さな水たまりを作った。

「続けろ。残り三周だ」

「三周」

「文句があるなら、四周にしてもいいんだぞ」

アキラは拳を握りしめ、歩き始めた。

「もっとゆっくり歩け。腰を振って、ペニスを見せつけろ」

命令に従い、アキラは歩調を落とした。腰を左右に振ると、勃起したペニスと一緒に揺れる。先走りが糸を引き、空中に弧を描いた。

「ああ、最高だな。聖職者がこんな姿で歩いてる。お前の神様が見たら、何て言うかな」

アキラの目から涙が溢れた。

「神に、謝れ」

「謝れ？ 俺が？」

レンガが腹を抱えて笑った。

「いい度胸だ。だが、その立場でそれを言うか？」

勃起して先走り垂らしながら、歩かされてる分際で」

アキラは唇を噛んだ。血の味がした。

二周目に入った。足が重い。けれどペニスは一向に萎えない。むしろ、歩くたびに揺れる刺激で、さらに硬くなっているような気がした。

「止まれ。こっちを向け」

アキラは足を止め、レンガの方を向いた。

「両手を頭の後ろで組め。そうだ。その姿勢で立ってろ」

両手を頭の後ろに回す。体が完全に無防備になった。勃起したペニスが、レンガの視線の前に晒される。

「いい眺めだ」

レンガがゆっくりと近づいてきた。アキラの目の前に立ち、上から見下ろす。

「お前のペニス、脈打ってるぞ。ドクンドクンって。そんなに触ってほしいか」

「ち、違います」

「じゃあ、このまま放置されたいか？ イケないまま、ずっと勃起したまま」

アキラの喉が鳴った。どちらも嫌だった。触られるのも、放置されるのも。

「答える。触ってほしいのか、ほしくないのか」

沈黙が続いた。レンガが片眉を上げる。

「答えないなら、このまま朝まで立たせておくぞ。勃起したまま、一晩中な」

「っ」

アキラの唇が震えた。

「……触って、ください」

「聞こえないな」

「触ってください。お願いします」

「どこを？」

「ペニス、を」

「もっとはっきり」

「私の勃起したペニスを、触ってください」

レンガの目が細まった。

「よく言えた」

レンガがアキラのペニスを握った。油で濡れた手が、張り詰めた肉棒を包み込む。

「っあ」

「さっきの続きだ。イかせてやる」

レンガの手が激しく動き始めた。ジュコジュコジュコ、と淫らな音が響く。

「あっ、あっ、あああっ」

アキラの声が広間に木霊した。腰が勝手に動き、レンガの手に突き出す。

「気持ちいいか？ 言葉で言え」

「い、言えません」

「言わないと止める」

手が止まった。アキラのペニスが、空しく脈打つ。

「お願い、続けて」

「何を続けるんだ？ ちゃんと言え」

アキラの顔が羞恥で歪んだ。涙が頬を伝う。

「手で、してください」

「何をだ」

「ペニスを、扱いて」

「もっと」

「お願いします、私のペニスを、扱いて、イかせて、ください」

レンガの口角が上がった。

「いい子だ」

手が再び動き始めた。今度はさらに激しく、容赦なく。

シュコシュコシュコシュコシュコ。

アキラの意識が飛びそうになった。下腹部に熱が集中し、睾丸が引き上がる。

「イきそうか？」

「は、はい、もう」

「じゃあいけ。俺の前で、思いっきり射精しろ」

レンガの言葉が引き金になった。

アキラの体が弓なりに反った。下腹部に溜まった熱が、一気に弾けた。

「あああああっ」

絶頂の瞬間、ペニスが大きく脈打った。びゅるるっ、と白濁した精液が噴き出す。最初の一発は勢いよく飛び、石床から一メートル以上先に着弾した。

「おお、飛んだな」

レンガが感心したように声を上げた。だが手は止めない。

二発目。びゅくびゅく、と脈打ちながら射出される。濃い白濁液が、アキラの足元に飛び散る。

三発目。勢いは衰えたが、量は変わらない。とろりと垂れ落ち、レンガの指を汚した。

「まだ出るのか。どんだけ溜めてたんだ」

四発目、五発目。もはや噴射というより、ドクドクと溢れ出る感覚だった。精液がレンガの手から滴り、床に白い水たまりを作っていく。

「んっ、ひっ、あっ」

アキラの声が途切れ途切れになった。射精が終わっても、レンガの手は止まらない。敏感になった亀頭を、さらに扱き続ける。

「ま、まって、もう」

「何が『もう』だ。まだ終わってない」

レンガの指が、射精直後の尿道口を擦った。じゅる、と残った精液が絞り出される。

「ひっ、あっ、やっ」

過敏になった先端を刺激され、アキラの腰がびくんと跳ねた。快感と痛みの中間のような、言葉にできない感覚が走る。

「最後一滴まで出してやる」

レンガの指が亀頭を締め付けるように握り、根元から先端へ絞り上げた。ぶっ、と最後の精液が押し出され、指先を汚した。

「これでよし」

ようやくレンガの手が離れた。アキラのペニスは、射精を終えてもまだ半勃起状態だった。先端から精液の残りがとろりと垂れ、糸を引いている。

「へえ、結構溜まってたな。これ全部、童貞の溜め込んだ分か」

レンガが精液にまみれた指を眺めながら呟いた。白い液が指の間から糸を引き、床に落ちていく。

「ひく、ひくっ」

アキラの体が細かく震えていた。膝から力が抜け、その場に崩れ落ちそうになる。

「おっと」

レンガがアキラの体を支えた。意外にも、その手は荒くなかった。

「今日はここまでだ。お前、体力なさすぎるな」

アキラは答える力もなかった。全身の力が抜け、レンガにもたれかかる。

「明日からが本番だ。覚悟しておけ」

レンガの声が、遠くから聞こえるようだった。

意識が薄れていく中、アキラは思った。

これが罰なのだと。自分の犯した罪への、神からの罰なのだと。

だから、耐えなければならない。

どんな屈辱にも。

レンガの腕の中で、アキラは意識を手放した。

夜。松明の光が揺れる広間の隅。

アキラは壁にもたれ、膝を抱えていた。レンガはどこかへ姿を消している。

体はまだ熱かった。

自分の手を見つめる。さっき、あの男に扱かれた。そして、イカされた。

涙が頬を伝った。

「なぜ」

声が震える。

なぜ、気持ちよかったのか。

なぜ、見られて興奮したのか。

なぜ、あの男の言葉に体が反応したのか。

分からなかった。

ただ、一つだけ分かることがあった。

この迷宮を出るまで、アキラはあの男の玩具になる。

そしてそれは、まだ始まったばかりだということ。

暗闇の中で、アキラは膝に顔を埋めた。

レンガの音が、耳の奥で木霊していた。

『お前が泣いて許しを乞うまで、俺の玩具になれ』

許しを乞う日など、来るものか。

アキラは拳を握った。

まだ、折れない。

まだ。

2

第2話 観察者の眼

目覚めたとき、体中が軋んでいた。

アキラは冷たい石床の上で身を起こした。薄い毛布が一枚、体にかけている。誰がかけたのか。考えるまでもなかった。傍らには、脱がされた服が畳まれて置いてある。それもレンガがやったのだろう。

「起きたか」

声のした方を見る。レンガが壁にもたれ、干し肉を齧っていた。虎の耳がぴくりと動く。

「食え。死なれると困る」

干し肉と水袋が投げられた。アキラは無言でそれを受け取り、口に運んだ。塩辛い肉が、空っぽの胃に染みる。

「今日は先に進む。ついてこい」

レンガが立ち上がった。松明を手に、暗い通路へ歩き出す。

アキラは服を着直し、体を引きずるように立ち上がった。昨夜のことが、まだ体に残っている。股間が微かに疼く。羞恥の記憶が、熱となって蘇った。

黙ってレンガの後を追う。

迷宮の通路は入り組んでいた。分岐を曲がり、階段を下り、また曲がる。アキラには、どこをどう歩いているのか全く分からなかった。

「この先に罠がある」

レンガが足を止めた。前方の通路を顎で示す。

「床石が一部だけ色が違ುದろ。踏むと天井から槍が降ってくる」

アキラは目を凝らした。確かに、床石の一部がわずかに黒ずんでいる。

「どうやって避けるのですか」

「壁際を歩く。ただし」

レンガがアキラの方を振り返った。

「お前が先だ」

「え」

「俺が後ろから見てやる。間違えたら教えてやるよ。間に合えばな」

アキラの背筋が凍った。つまり、間に合わなければ死ぬということだ。

「それは」

「嫌なら戻れ。一人で出口を探せばいい」

拒む理由が見つからなかった。

アキラは一步を踏み出した。壁に背中を擦りつけるようにして、慎重に進む。黒ずんだ床石を避け、一步、また一步。

汗が額を伝う。心臓が喉元まで上がってきそうだった。

「もう少し左」

レンガの声が背後から聞こえた。アキラは体を左にずらし、次の一步を踏み出す。

長い通路だった。十メートルほどの距離が、果てしなく遠く感じられた。

ようやく罠の区間を抜けたとき、アキラの足は震えていた。

「よくできた」

レンガが追いついてきた。何事もなかったように、アキラの隣を歩く。

「お前、度胸はあるな。泣いて動けなくなる奴もいるのに」

「……そう、ですか」

「褒めてるんだぞ。もっと喜べ」

喜べるわけがなかった。命を弄ばれて、何を喜べというのか。

さらに歩き続けた。いくつかの部屋を通り抜け、別の通路に入る。

「ここで休憩だ」

レンガが足を止めた。小さな広間だった。壁に苔が生え、天井から水が滴っている。

「水場がある。体を拭け。お前、汗臭い」

アキラは言われるまま、滴り落ちる水で顔と首を洗った。冷たい水が、火照った肌に心地よかった。

「ついでに下も脱げ」

アキラの手が止まった。振り返ると、レンガが壁にもたれて立っていた。虎の目が、じっとアキラを射抜いている。

「昨日の続きだ。お前の体、もっとよく見たい」

アキラの喉が詰まった。

「ここで、ですか」

「他に誰がいる？ さあ、脱げ」

逆らう余地はなかった。アキラは震える手でローブを脱ぎ、シャツを脱ぎ、ズボンを下ろした。下着だけの姿になる。

「全部だって言っただろ」

下着も脱いだ。生まれたままの姿が、松明の光に照らされた。

レンガがゆっくりと近づいてきた。アキラの体を、上から下まで舐めるように見る。

「昨日より落ち着いてるな。慣れたか」

「慣れるわけが」

「体は正直だぞ」

レンガの指がアキラの股間に伸びた。萎えたペニスを軽く持ち上げる。

「まだ柔らかいな。昨日はすぐ硬くなったのに」

アキラは目を伏せた。答えなかった。

「まあいい。今日は別のことをする」

レンガが自分のズボンに手をかけた。紐を解き、前を開ける。

アキラは目を逸らそうとしたが、できなかった。

レンガの下着から、大きなものが覗いていた。まだ半勃起だが、すでにアキラのものより明らかに大きい。

レンガは躊躇いなく下着を下ろした。

虎の獣人らしく、陰毛は濃い橙色だった。その中から、太いペニスがぶら下がっている。半勃起の状態でも、長さはアキラの完全勃起時より長そうだった。亀頭は薄い皮に覆われ、先端だけがわずかに顔を出している。

「見ろ」

レンガがアキラの顎を掴み、顔を下に向けさせた。

「お前と俺のを比べる。どっちがデカいか、形がいいか。じっくり観察しろ」

アキラの顔が熱くなった。男同士でペニスを比べるなど、聞いたこともない。

「そんな、こと」

「嫌か？ じゃあ証書は」

「……分かりました」

レンガの唇が弧を描いた。

「じゃあまず、お前のを勃たせろ。自分で扱いて、硬くしろ」

アキラの手が震えた。昨夜は相手にされるがままだった。だが今日は、自分で自分を触れと言われている。

「早くしろ。見てやるから」

アキラは目を閉じた。自分のペニスに手を伸ばし、握る。冷たい指が、柔らかい肉に触れた。

しゅっ、しゅっ。

ゆっくりと上下に動かす。目の前にレンガがいる。見られている。その意識が、羞恥となって全身を駆け巡った。

「目を開けろ。自分のを見ながらやれ」

目を開けた。自分の手が、自分のペニスを扱っている。皮が剥けたり戻ったりするのが見える。

「情けない顔してるな。聖職者が自慰してる顔だ」

言葉責めが耳に刺さる。なのに、ペニスは徐々に硬くなっていった。血が集まり、竿が太くなる。亀頭が皮から顔を出し、薄いピンク色が露わになった。

「もう勃ったか。早いな」

レンガの声に嘲りが混じる。アキラのペニスは完全に勃起し、上を向いて脈打っていた。

「よし、止めろ」

手が止まる。勃起したペニスが、空しく揺れた。

「次は俺の番だ」

レンガが自分のペニスを握った。太い指が、さらに太い肉棒を包み込む。

しゅこ、しゅこ、しゅこ。

レンガの手が動くたびに、ペニスが膨張していった。半勃起だったものが、みるみるうちに硬くなる。血管が浮き出し、竿全体が赤黒く色づいていく。

「見てろ。これが男のモノだ」

完全に勃起したレンガのペニスは、凶器のようだった。長さは優に十五センチを超え、太さもアキラの手首ほどある。亀頭は大きく膨らみ、カリの部分が鋭く張り出していた。先端から、透明な液がじわりと滲み出ている。

「さあ、比べるぞ」

レンガがアキラの腰を掴み、引き寄せた。二人のペニスが、至近距離で並ぶ。

「見ろ。どっちがデカイ」

一目瞭然だった。アキラのペニスは、レンガの三分の二ほどしかない。太さも、長さも、完全に負けている。

「お前のは可愛いな。まるで子供のちんこだ」

レンガの指がアキラの亀頭に触れた。くにつ、と先端を押す。

「んっ」

声が漏れた。勃起した状態で触られると、感度が違う。

「亀頭の形を見ても。お前のはまん丸で、カリが小さい。俺のは尖ってて、カリがデカいだろ」

レンガが自分の亀頭を見せつけるように突き出した。確かに、形が全く違う。レンガの亀頭は砲弾のように尖り、カリの部分が鎧のように張り出している。

「この形だと、挿れた時に中を抉るように刺激できるんだ。お前のじゃ無理だな」

アキラは何も言えなかった。自分のペニスを舐められている。なのに、その言葉で興奮している自分がいた。ペニスがびくりと跳ねる。

「お、反応した。馬鹿にされて興奮してるのか」

「違、います」

「嘘つくな。ほら、先走りが出てきた」

レンガの指がアキラの尿道口を擦った。確かに、透明な液が滲み出している。

「俺のも出てる。比べてみる」

レンガが二人の亀頭を近づけた。お互いの先走りが、糸を引いて繋がる。

「お前のは水っぽいな。俺のはもっと粘ってる。見ろ、糸を引いてるだろ」

確かに、レンガの先走りはアキラのより濃く、ねっとりとしていた。二人の亀頭を繋ぐ糸が、きらきらと光っている。

「このまま擦り合わせるぞ」

レンガが二人のペニスを片手で握った。アキラのペニスと、レンガのペニスが、肉と肉で密着する。

「あっ」

アキラの声が漏れた。他人のペニスの熱さが、直接伝わってくる。脈打つ感覚が、自分のものと混ざり合う。

「気持ちいいか。男のちんこ同士が触れ合う感覚、初めてだろ」

レンガの手が動き始めた。二本のペニスを同時に扱く。ぬるぬるとした先走りが潤滑剤となり、肉が擦れ合う音がする。

ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ。

「お前のちんこ、俺のに負けてるな。俺のが太いから、お前のが押し潰されてる」

確かに、アキラのペニスはレンガのペニスに圧迫されていた。太い肉棒に寄り添うように、小さく縮こまっている。

「んっ、あっ、ひっ」

アキラの声が途切れ途切れになった。レンガのペニスの脈動が、自分のペニスに伝わってくる。どくん、どくん、と強い鼓動。

「俺のカリがお前の亀頭を擦ってるぞ。気持ちいいだろ」

レンガの張り出したカリが、アキラの亀頭を撫でるように擦れた。

「ひゃっ」

甲高い声が出た。敏感な部分を、硬い突起で刺激されている。

「いい声だな。もっと出せ」

レンガの手が加速した。ジュコジュコジュコ、と淫らな音が響く。二人の先走りが混ざり合い、泡立ち始めた。

「見ろ、お前と俺の汁が混ざってる。もう区別がつかない」

アキラは下を見た。二本のペニスは先走りでぬらぬらと光り、白っぽい泡が纏わりついていた。どちらのものか分からない液体が、レンガの指から滴り落ちている。

「お前の体、俺に馴染んできてるな。昨日より反応がいい」

「そんな、こと」

「否定しても無駄だ。ほら、ちんこが正直に答えてる」

レンガの指が、アキラのペニスの根元を締め付けた。

「びくびく痙攣してるぞ。もうイきそうか」

「まだ、です」

「嘘つくな。睾丸が上がってきてる」

確かに、アキラの睾丸は引き締まり、体に引き寄せられていた。絶頂に近い証拠だ。

「でも、まだイかせない」

レンガの手が止まった。アキラのペニスは限界まで張り詰め、先端から先走りがとろとろと流れ落ちている。

「あ、あ」

寸止めされた快感が、焦燥となって全身を駆け巡る。

「このまま観察を続けるぞ。お前のちんこ、もっとよく見せろ」

レンガがアキラのペニスを両手で持ち上げた。下から覗き込むように、じろじろと観察する。

「裏筋がびくびくしてる。ここが敏感なのか」

指が裏筋を這った。ちろ、と爪が擦れる。

「ひっ」

「やっぱりな。ここを重点的に責めると、お前はすぐイきそうになる」

レンガの指が裏筋を上下に撫で始めた。ゆっくりと、焦らすように。

「あっ、あっ、やめ」

「やめない。もっと見せろ」

レンガの顔がアキラの股間に近づいた。至近距離で、勃起したペニスを観察している。吐息が亀頭にかかり、アキラの体がびくりと跳ねた。

「お前の亀頭、今は真っ赤だな。血が集まってる。カリのところが特に色が濃い」

指が亀頭を押した。ぐにつ、と弾力のある肉が凹む。

「硬いけど、弾力がある。いい形だ。小さいけどな」

また眨められた。なのに、ペニスは萎えない。むしろ、さらに硬くなった気がする。

「お前、馬鹿にされると興奮するタイプだな。分かってきた」

レンガが立ち上がった。自分のペニスを、アキラの顔の前に突き出す。

「今度は俺のを観察しろ。じっくり見ろ」

アキラの目の前に、巨大なペニスがあった。熱気と匂いが顔にかかる。獣の匂い。雄の匂い。

「カリの形を見ろ。触ってもいいぞ」

アキラの手が震えながら伸びた。レンガの亀頭に触れる。熱い。そして、硬い。

「お前の指じゃ、俺の亀頭を一周できないだろ」

試してみた。確かに、親指と人差し指でカ리를挟もうとしても、届かない。それほど太い。

「竿も握ってみろ」

手を下にずらす。竿を握る。太すぎて、指が回らなかった。

「どうだ。俺のちんこ、お前のと全然違うだろ」

「……はい」

認めるしかなかった。大きさも、太さも、形も、何もかもが違う。

「そのまま扱け。俺をイかせてみろ」

アキラの手が動き始めた。太いペニスを、両手で扱う。

しゅこ、しゅこ、しゅこ。

「もっと強く。お前の握力じゃ、くすぐったいくらいだ」

力を込める。レンガのペニスは硬く、熱く、脈打っていた。手の中で存在を主張している。

「そうだ。もっと速く」

シュコシュコシュコ。

レンガの先走りがアキラの手を濡らした。ぬるぬるとした液体が、指の間から溢れる。

「お前、ちんこ扱くの上手いな。経験あるのか」

「ありません」

「じゃあ才能だ。もしかして、こういうことが好きなんじゃないか」

「違います」

「じゃあなぜ、お前のちんこがまた硬くなってる」

アキラは下を見た。いつの間にか、自分のペニスも再び完全勃起していた。レンガのペニスを扱っているだけで、自分も興奮している。

「男のちんこ握って興奮してるのか。聖職者が」

「っ」

言葉に詰まった。否定できなかった。体が正直すぎる。

「もういい。今度は俺がお前をイかせてやる」

レンガがアキラの手を払い、代わりにアキラのペニスを握った。

「さっきの続きだ。今度は止めない。思いっきりイけ」

手が動き始めた。ジュコジュコジュコ、と激しい音。

「あっ、あっ、あああっ」

さっき寸止めされていた分、快感が一気に押し寄せてきた。下腹部に熱が集中し、睾丸が引き上がる。

「お前のカリ、俺の指に引っかかるな。小さいけど、形はいい」

レンガの指がカリを重点的に刺激した。くりくりと、執拗に擦る。

「ひっ、あっ、もう」

「もう何だ。言え」

「イき、そう」

「じゃあいけ。俺の前で、思いっきり射精しろ」

レンガの手が加速した。シュコシュコシュコシュコ。

アキラの背中が大きく仰け反った。

「あああっ」

射精の瞬間、ペニスが激しく脈打った。びゅるるっ、と白濁した精液が噴き出す。一発目はレンガの腹に当たり、べちゃりと音を立てた。

「おお、俺に飛んできた」

二発目、三発目。精液がレンガの手を汚し、床に飛び散る。

「まだ出るか。昨日より量多いな」

四発目、五発目。勢いは衰えたが、どくどくと溢れ続ける。レンガの指の間から、白い液が滴り落ちた。

「んっ、ひっ、あっ」

射精後も手は止まらない。敏感になった亀頭を、さらに扱き続ける。

「まだだ。最後まで絞り出す」

「やっ、もう、無理っ」

「無理じゃない。まだ残ってる」

レンガの指が亀頭を握り込み、絞るように動いた。ぷっ、ぷっ、と最後の精液が押し出される。

「これでよし」

ようやく手が離れた。アキラはその場に崩れ落ちそうになり、壁に手をついて体を支えた。

全身から力が抜けている。膝が笑い、呼吸が乱れていた。

「まだ終わりじゃないぞ」

レンガの声が聞こえた。見上げると、レンガのペニスがまだ勃起したままだった。先端から、先走りがとめどなく流れている。

「俺はまだイってない。お前の手で、イかせてもらう」

アキラの手が、再びレンガのペニスに伸びた。射精後の脱力した体で、太い肉棒を握る。

「もっと強く。もっと速く」

シュコシュコシュコ。

レンガの息が荒くなった。虎の耳がぴんと立ち、尾が左右に振れる。

「そうだ、いいぞ。お前の手、気持ちいい」

先走りがさらに溢れ、アキラの手をぬるぬるに濡らした。

「もうすぐだ。口を開けろ」

「え」

「顔にかけてやる。口を開けろ」

アキラの口が、ゆっくりと開いた。

「いくぞ」

レンガの体が震えた。ペニスが大きく脈打つ。

「っ」

びゅるるるっ。

最初の一発は勢いよく飛び出し、アキラの頬に着弾した。熱い液体が、肌を濡らす。

「ぐっ、はっ」

二発目。額に当たり、眼鏡のレンズを汚した。

三発目。開いた口の中に、どろりと入ってきた。

「んぐっ」

アキラの喉が鳴った。精液の味が口に広がる。苦くて、塩辛くて、生臭い。

四発目、五発目。顔全体を白く汚していく。鼻の横、顎、首筋。レンガの精液が、アキラの顔を覆い尽くした。

「はあ、はあ」

レンガの呼吸が荒い。射精を終えたペニスは、まだ半勃ちのまま揺れていた。

「いい顔だな」

レンガがアキラの顎を掴み、顔を上げさせた。

「精液まみれの聖職者。最高だ」

アキラは何も言えなかった。顔を拭こうとしたが、レンガに手を掴まれた。

「まだ拭くな。そのままでいろ」

「っ」

「お前の顔に俺の精液がかかってる。それを見ながら、しばらく休憩だ」

レンガが壁にもたれて座った。満足げな顔で、アキラを眺めている。

アキラは俯いた。顔から精液が滴り落ちる。屈辱で、全身が熱かった。

けれど、心のどこかで思っていた。

こんなことで、壊れてたまるか。負けてたまるか。

こんなことで、自分は壊れない。

アキラは唇を噛んだ。口の中に残った精液の味を、飲み込んだ。

数時間後。

アキラは迷宮の水場で顔を洗っていた。ようやく、レンガから許可が出た。

「きれいになったか」

レンガが背後から声をかけた。

「……ええ」

「お前、思ったより根性あるな」

アキラは振り返らなかった。

「普通なら泣いて許しを乞うところだ。お前は何も言わない」

「言っても無駄でしょう」

「そうだな。無駄だ」

レンガの足音が近づいた。

「だから面白いんだ。お前を壊すのが、楽しみになってきた」

アキラの背筋が震えた。

「明日も、明後日も、お前を弄んでやる。いつか必ず、泣いて許しを乞わせる」

アキラは何も答えなかった。

ただ、水面に映る自分の顔を見つめていた。

まだ、目に光がある。

まだ、折れていない。

レンガの声が、遠くで木霊していた。

「楽しみにしてろ。明日は、もっと面白いことをしてやる」

アキラは目を閉じた。

祈りの言葉が、唇から漏れた。

神よ。

どうか、この試練を乗り越える力を。

答えは、返ってこなかった。

3

第3話 剥がれる痛み

迷宮の奥へ進むにつれて、空気が変わった。湿っているのとも違う。重いのだ。肺に入る空気そのものに、粘りがあるような。

アキラは黙ってレンガの背中を追っていた。三日目の朝。足は痛い。体も重い。けれど一番摩耗しているのは、たぶん心のほうだった。

「この先は危ない」

レンガが足を止めた。虎の耳がせわしなく動いている。音を拾っているのだろう。アキラには何も聞こえないが、獣人の聴覚は別次元だ。

「何か、いるのですか」

「守護者だ。この階層を守ってる魔物。縄張りに入ったら、まず逃がしてくれない」

背筋が冷たくなった。迷宮に魔物が棲むことは知識として知っていたが、知識と実感の間には深い溝がある。

「どう……するのですか」

「迂回是可以。ただ、半日はロスする」

レンガが壁に片手をつき、しばらく何かを考え込んでいた。虎の尾が左右に揺れる。苛立っているのか、迷っているのか。

「……お前、走れるか」

「え」

「守護者の縄張りを突っ切る。見つかる前に抜けられれば、それが一番早い」

アキラは自分の足を見下ろした。聖職者の訓練に体力錬成の類は含まれていない。祈りと座学が大半で、走り込みなど一度もしたことがなかった。

「……難しいかもしれません」

「だろうな」

あっさり同意された。溜息つきでだ。

「仕方ない。俺が囷になる。お前は隠れてろ」

「え」

「守護者を引きつけてる間に、向こう側へ駆け抜けろ。合図を出す。それまで動くな」

反射的に口が開いた。なぜ、と聞いたかった。脅迫者が、人質を守る理由はなんだ。

だが言葉になる前に、レンガがアキラの腕を掴んで歩き出していた。

通路を抜けると、広い空間に出た。天井がやたらと高い。松明の明かりが途中で吞まれて、上の方は闇に沈んでいる。

「あの岩陰に入れ。動くな」

指さされた場所に、アキラは身を潜めた。心臓がうるさい。

レンガが広間の中央まで歩いていった。背中が遠ざかる。

「――出てこい」

声が天井に反響した。

返事は、上から来た。

天井に張り付いていたそれが、ずるりと降りてくる。巨大な蜘蛛だった。八本の足。無数の目。牙が松明の光を反射して濡れている。体長は一人の背丈ほどもある。

悲鳴が喉まで上がってきた。歯を食いしばって堪えた。声を出したら見つかる。

「こっちだ、でかぶつ」

レンガが蜘蛛を挑発する。虎の尾が大きく振れた。蜘蛛が突進した。レンガは身を翻して反対方向に走り、蜘蛛がその背中を追う。

今だ。

岩陰から飛び出した。走った。まっすぐ、反対側の出口へ。足がもつれそうになる。こんなに全力で走ったことは、生まれてから一度もない。

出口が見えた。あと少し――

背後で、何かが弾ける音がした。

振り返ってはいけない。分かっている。分かっているのに、足が勝手に止まった。

レンガの足に、蜘蛛の糸が絡みついていた。白く太い糸が、片足を完全に拘束している。

「行け」

レンガが叫んだ。

行けばいい。ここで逃げれば、自由だ。レンガが死ねば、借金証書も消える。

なのに、体が動かなかった。足がその場に根を張ったように、びくともしない。

気づけば、懐に手を入れていた。

護符。聖職者として唯一持っている、魔を祓うための道具。使えるのは一度きりかもしれない。それでも。

「――神の御名において」

祈りの言葉が、自分でも驚くほどはっきりと口をついた。護符を蜘蛛に向けて投じる。

閃光。白い光が広間を灼いた。蜘蛛が甲高い悲鳴を上げ、後退していく。

「今です！」

レンガの元へ走った。足に絡みついた糸を、両手で引き千切る。硬い。指が痛い。構わず引いた

。

糸が切れた。

レンガの腕を掴んで、出口へ走る。蜘蛛が態勢を立て直す前に。狭い通路に二人で飛び込んだ。巨体は入れない。

しばらく走って、ようやく足が止まった。

壁に手をついて、肩で息をする。心臓が喉まで上がってきている気がした。

「お前」

レンガの声が、荒い呼吸の間から聞こえた。

「なぜ戻った」

答えられなかった。自分でも分からない。

「逃げれば自由だった。俺が死ねば、証書も消える。それくらい分かってるだろうが」

「……分かりません」

正直にそう言うしかなかった。なぜ戻ったのか、本当に、分からないのだ。

レンガが黙った。虎の目が、じっとアキラの顔を見ている。暗い通路の中で、金色の虹彩だけが光っていた。

「お前、馬鹿だな」

「……そう、でしょうか」

「馬鹿だよ。俺みたいな奴を助けるなんて」

声の色が、いつもと違った。嘲りではない。何か別のもの。名前をつけられない、複雑な響き。

「――昔。俺は聖職者に仕えていた」

アキラは息を止めた。

「護衛だった。獣人の一族で、神殿の聖職者を守るのが俺たちの役目だった」

レンガの目が遠くを見ている。壁画もない暗い壁を見ているはずなのに、その視線はもっとずっと遠い場所に向いていた。

「その聖職者に裏切られた。――それだけだ」

短い言葉だった。けれど、その「それだけ」の中に、途方もない重さが詰まっているのが分かった。

「だから俺は、聖職者が嫌いだ。白い服を着て、清い顔して、中身は腐ってる連中が」

アキラは唇を噛んだ。何か言うべきだと思った。けれど何を言えばいいのか分からない。自分もまた白い服を着た聖職者のひとりだ。

「だが――お前は戻ってきた。馬鹿みたいに」

レンガの手が、アキラの顎を掴んだ。乱暴に顔を持ち上げられ、虎の目と目が合う。近い。吐息が頬にかかるほど。

「お前は、あいつらとは違うのか」

「……分かりません」

「また分からないか。それしか言えねえのか、お前」

「本当に分からないのです。私は――罪人ですから」

レンガの手が止まった。指の力が、ほんの少し緩む。

「罪人？」

「借金、罪の贖いです。過去に罪を犯したから、罰を受けている」

声が震えた。自分の声が、こんなに頼りないものだとは思わなかった。

「だから――あなたに弄ばれることも、罰だと思っています。神からの」

沈黙。長い沈黙。

レンガの手がゆっくり離れた。

「……そうか」

虎の目に、さっきとは違う光が浮かんできた。怒りでも嘲りでもない。もっと厄介な何か。

「お前の罪が何かは聞かない。――だが、罰を受けたいなら、俺が与えてやる」

声が低く落ちた。

「今日の罰だ。守護者のせいで時間をロスした。お前のせいじゃないが――まあ、理由なんかいるか？」

体が強張った。

「それが、お前の望みなんだろ」

安全な部屋を見つけて、二人はそこに落ち着いた。

レンガが腰の袋から何かを取り出す。銀色の布。薄くて光沢があり、金属のような質感だった。

「魔法粘着布だ。一度貼り付けたら、解呪しない限り剥がれない」

嫌な予感がした。予感はお的中する。

「これをお前のちんこに使う」

「え」

「太ももに貼り付ける。勃起すると、布が引っ張られて痛い。萎えていれば何ともない。――単純な仕組みだ」

レンガが布を広げて見せた。掌ほどの大きさ。光を受けて鈍く光る。

「つまり、俺がお前を興奮させなければ何も起きない」

唇の端が上がった。

「――だが、俺はお前を興奮させる。お前は勃つ。そして痛む。それが今日の罰だ」

全身の血が冷えた。

「脱げ」

逆らう術はなかった。服を脱ぎ、壁に背中を預ける。石の冷たさが、裸の肌に染みた。

レンガが近づいてきた。アキラの股間を一瞥する。

「萎えてるな。いい」

大きな手がアキラのペニスを持ち上げた。柔らかいそれを、右の太ももに押し当てる。

「動くな」

魔法粘着布が貼られた。ペニスと太ももの間を、銀色の布がぴたりと繋ぐ。引っ張っても微動だにしない。

「準備完了」

レンガが数歩下がり、壁にもたれた。腕を組んで、値踏みするようにアキラの体を眺める。

「さあ――始めるか」

アキラは自分の股間を見下ろした。ペニスは太ももに固定されている。このまま勃起すれば、布が皮膚を引っ張る。理屈は分かる。分かるから怖い。

「まず、言葉からだ」

レンガの声が、反響の少ない小部屋に響いた。

「お前、昨日俺に抜かれて――気持ちよかっただろ」

心臓が跳ねた。

「顔にぶっかけられて。あの時、嫌だって言ったか？ 言ってないよな」

耳が熱い。思い出したくないのに、体が勝手に記憶を引っ張り出す。

「俺の精液の味、覚えてるか。苦くて――しょっぱかっただろ」

口の中に、昨日の感触が蘇る。熱い液体。飲み込んだときの、あの。

股間がむずっとした。

「……正直な体だ。もう反応してやがる」

見下ろすと、ペニスが僅かに膨らみ始めていた。まだ勃起とは言えない。けれど、確実に血が集まっている。

「このまま勃ったら、布に引っ張られるぞ。――痛いぞ」

必死に別のことを考えた。祈りの言葉。聖典の冒頭。何でもいい、意識を逸らせるものなら。

「無駄だ」

レンガがゆっくりと近づいてきた。背後に回り、耳元に顔を寄せる。温かい吐息が耳の縁をなぞった。

「お前のちんこ、小さくて可愛いよな。昨日、俺のと比べたろ。三分の二くらいだったか」
背中が震えた。息が近い。声が近い。

「でも形はいいって言っただろ。気に入ってるんだ、俺は」
言葉が止まらない。レンガの低い声が、次から次へと耳に流し込まれる。ペニスは、もう半分ほど硬くなっていた。

「ほら。半勃ちだ」
見下ろした。ペニスが膨らみ、太ももから浮き上がろうとしている。魔法粘着布がそれを許さない。皮膚が引きつった。

「んっ——」
痛みが走った。まだ軽い。けれど確実に、布が引っ張っている。

「止められるか？」
レンガの指が、胸に触れた。乳首を、爪の先で軽く引っかく。

「あっ」
声が出た。体が反応した。ペニスがさらに硬くなる。

ぴりっ。
布が引っ張られる。皮膚が引きつり、鋭い痛み。

「痛いか」
「は、い——」
「じゃあ勃たなければいい。簡単だろ」

簡単なわけがなかった。レンガの指が乳首を弄び続けている。つまむ。転がす。軽く引っ張る。くりくり。つんつん。

敏感な突起が刺激されるたびに、快感が下腹部に落ちていく。それに比例して、ペニスは硬くなる。

ぴりぴりぴり。
布の引っ張りが強まった。勃起したペニスが太ももから離れようとして、布に阻まれる。逃げ場がない。

「あっ——痛っ」
「乳首、弱いな。こんなに反応する」
レンガの指が両方の乳首を同時に摘んだ。ぐりぐりと捻る。容赦がない。

「ひっ、あっ——」

快感と痛みが同時に来る。上半身は気持ちいい。下半身は痛い。体が矛盾している。

「面白いな。気持ちよくなるほど、痛くなる」

レンガの手が腹に降りてきた。臍の下を撫で、恥骨の手前で止まる。

「ここは触らない。触らなくても——お前は勃つ」

指が恥骨の周りをぐるりと回る。股間には決して触れない。ぎりぎりの場所を、何度も何度も。

「触ってほしいか」

声が出なかった。

「触ってほしいなら言え。——ただし、触ったらもっと勃つぞ。もっと痛くなる」

息を詰めた。触ってほしい。でも痛い。どちらを選べばいいのか、もう分からなくなっている。

「黙ってるか。——じゃあ、もっと焦らす」

指が太ももの内側に移った。足の付け根を、ゆっくりと這う。

「ここも敏感だろ。鼠蹊部」

ペニスのすぐ横を、指が行ったり来たりする。触れそうで触れない。

「あっ、あっ——」

焦らされるほど、体が過敏になる。触れてもいないペニスが、もどかしく脈打っている。

完全に勃起していた。

布が限界まで張っている。皮膚が赤くなっている。ペニスは太ももから離れようとして、銀色の布に押さえ込まれている。痛い。痛いのに、萎えない。

「痛いだろ」

「っ——はい」

「でも萎えないだろ」

認めるしかなかった。痛みが——快感に変わりつつある。その事実が、何よりも怖かった。

「お前、マゾだな」

「違い、ます」

「違わないだろ。痛いのに勃ってる。——痛みで興奮してるじゃねえか」

レンガの指が、ついにペニスに触れた。布で固定されたそれを、指先でつんと突く。

「ひゃっ——」

体が跳ねた。その振動で布がさらに引っ張られ、痛みが走る。

「動くと余計痛いぞ」

動くなと言われても、体が勝手に反応してしまう。指が先端を弄るたびに、びくびくと痙攣が走った。

「先走り出てるな。布の隙間から垂れてきてる」

見ると、透明な液が布の端から滲み出していた。ペニスは限界まで張り詰め、先端から止めどなく先走りを分泌している。

「このまま射精できるか——試してみるか」

「え」

「布で固定されたまま、イけるかどうか。面白そうだ」

レンガの指が、布の隙間からペニスの根元に触れた。握るように力が加わる。

「んっ」

「亀頭には触らない。ここだけで——イかせてやる」

指が根元を揉み始めた。ぐにぐにと、筋を刺激するように。奇妙な快感だった。先端には触れていないのに、根元だけの刺激で興奮が高まっていく。

「睾丸もだ」

もう片方の手が、アキラの睾丸を包んだ。ころころと転がすように揉む。

「お前の金玉、小さいな」

また眨される。なのに、体は反応する。ペニスがびくびくと痙攣し、先走りがさらに溢れた。

「もうすぐか」

「分かり——ません」

「自分の体なのに分からないか。——じゃあ俺が教えてやる。もうすぐだ」

指が加速した。根元を強く握り、睾丸を揉みしだく。

「あっ、あ——あ——あ——」

下腹部に熱が集中していく。射精が近い。でも亀頭に触れられていない。出せるのか。出せないのか。その境界が分からないまま、波だけが高くなっていく。

「イきそうか」

「は——い——」

「じゃあイけ。布に縛られたまま、射精しろ」

レンガの手が、ふいに止まった。離れていく。

「え——」

「手は離した。——自力でイけ」

「そんな」

「できないか？ じゃあ腰を振れ。自分で動いて、自分でイけ」

……腰が動いた。命じられたからではない。体が勝手に求めたのだ。前後に揺れる。布で固定されたペニスが、その振動で太ももに擦れる。

「ほら。自分から動いてる」

「んっ——あっ——」

恥ずかしい。こんなに恥ずかしいことがあるだろうか。自分から腰を振って、射精しようとしている。聖職者が。

「いい眺めだ」

ぐちゅ、ぐちゅ。

先走りで濡れたペニスが太ももに擦れる音。布と肌の隙間から、淫靡な音が響く。

「もっと速く」

腰の動きが速くなった。もう自分の意思では止められない。太ももに擦れるたびに布が引っ張られて痛む。痛みと快感が溶け合って、頭の中がぐちゃぐちゃになっていく。

「あっ——あっ——もう」

「イくか」

「はい——」

「イけ。俺に見せろ」

全身がびくんと強張った。

「あ——あ——あ——」

射精の瞬間、ペニスが激しく脈打った。布で固定されたまま、精液が噴き出す。

びゅるっ、びゅるっ。

白濁した液が布の隙間から飛び出し、太ももを汚し、床に滴り落ちた。

「出たな。——すごい量だ」

射精は止まらなかった。三発、四発、五発。布と皮膚の間に精液が溜まり、溢れ出す。

「んっ——ひっ——」

射精が終わると、ペニスは急速に萎えていった。布の引っ張りが緩む。痛みが引いていく。残ったのは、ぐったりとした脱力感だけだった。

「解除してやる」

レンガが布に触れ、短い呪文を呟いた。銀色の布がすりと剥がれる。

解放されたペニスは、射精を終えて力なく垂れていた。精液にまみれ、ぬらぬらと光っている。

「きれいにしてやる」

レンガの舌が――太ももを舐めた。

「っ――」

付着した精液を、舌で拭うように舐め取っていく。ざらりとした舌。獣人の舌だ。人間のものと違う。その異質な感触が、敏感になった肌の上を這う。

「お前の精液――昨日より濃い」

舌がペニスに届いた。射精後の敏感な先端を、ぺろりと舐め上げる。

「ひゃっ――」

体がびくんと跳ねた。射精直後の亀頭は過敏で、舌が触れるだけで悲鳴が出そうになる。

「まだ敏感か。もう少し舐めてやる」

先端から根元まで、ゆっくりと舌が這った。ねぶるように、丁寧に。

「やっ――もう、無理、です」

「無理じゃない。まだきれいになってない」

舌が亀頭を包み込んだ。ちゅぱ、と吸い上げる音。

「あっ、ひっ――あああっ――」

快感というより、もう痛みに近い。射精後の過敏な亀頭を吸われて、意識が飛びそうになった。

「もう一回イけるか」

「無理です――」

「試してみよう」

レンガの口がアキラのペニスを咥え込んだ。萎えかけていたそれが――口の中で、じわじわと硬くなっていく。

信じられなかった。さっき出したばかりなのに。

「若いな。回復が早い」

口が動き始めた。ちゅぱ、ちゅぱ、と吸い上げながら、舌が亀頭を刺激する。ざらついた舌の表面が、敏感な粘膜を撫でまわす。

「あっ――あっ――もう本当に――」

「二回目だ。イけ」

淫らな水音が響いた。レンガの口の中で、ペニスが限界まで張り詰めていく。

「イー――きます」

「イけ」

二度目の射精。

「んっ――」

びゆく、びゆく。

さっきより少ない。けれど確実に、精液が噴き出した。レンガの口の中に注がれ、飲み込まれていく。

レンガの喉が動いた。最後一滴まで吸い出して、ようやく口が離れた。

「二回イかせた。――満足か」

答える力など、もう残っていなかった。壁にもたれたまま、ずるずると崩れ落ちる。

「お前、本当に感度がいい。こんな短時間で二回イけるやつ――初めてだ」

レンガの手がアキラの髪を撫でた。乱暴ではなく、不器用に――優しい手つきで。

「面白いやつだな、お前」

その声に、いつもとは違う色があつた。

夜。

アキラは壁にもたれて膝を抱えていた。

体はまだ痺れている。二度の射精で、指先まで力が抜けていた。

「お前」

レンガの声が、少し離れた場所から聞こえた。

「今日――助けてくれたこと。礼は言わない」

「……はい」

「だが、忘れない」

足音が遠ざかった。見張りに行くのだろう。

目を閉じた。

レンガの過去。聖職者に仕え、守り、裏切られたこと。あの短い言葉の奥に、どれだけの痛みが眠っているのか。まだ聞けていない。聞いていい段階でもない。

自分の過去。犯した罪のこと。

二人とも、傷を抱えている。

今日、その傷の輪郭が――ほんの少しだけ、見えた。

拳を握った。

まだ折れない。折れるわけにはいかない。

でも――何かが変わり始めている。それだけは、確かだった。